



女性9名から始まった 茨城のミニカリ産地

茨城県坂東市から全国へ

ホワイトベル & スパイラル

茨城県坂東市(旧岩井市)の女性によるミニカリフラワー部会「ミニママ倶楽部」の杉野谷氏、J.A岩井の後藤氏を訪れ、ミニママ倶楽部の立ち上げから現在まで、そして今後の目標についてうかがいました。

ゼロからのミニカリ産地づくり

地域の普及センターで開かれていた講座に9名の女性が参加していたのですが、この講座での研究課題がきっかけでミニカリフラワーの栽培に取り組み始めました。女性の手だけで、新しい野菜の産地を作りたいという想いから、ミニカリ部会「ミニママ倶楽部」が平成16年にスタートしました。

どうしたら多くの人にミニカリフラワーを食べてもらえるか。みんなが集まってはアイデアを出し合いました。

「カリフラワー」と言えば白という印象が強いですがインパクトを出すためにオレンジとパープルを加え、3色で販売し、オリジナルのレシビを考案しました。オリジナルのキャラクターも自分たちで作成し、地元のレストランに協力を依頼して、年に2回カリフラワーフェアを行いカリフラワーを使った料理をお客様に提供しています。

毛羽立たないカリフラワー「ホワイトベル」との出会い

ミニママ倶楽部は部会の中で切磋琢磨しながら、カリフラワーの品質の向上に取り組んでいます。そんな中、毎年11月に開催される渡辺農事(株)岩井研究農場オーブンデーで純白の花蕾をした「ホワイトベル」を見つけました。春作の



毛羽立ちにくい「ホワイトベル」

カリフラワーはいつも花蕾の表面が毛羽立ってしまったのですが、この品種なら綺麗なカリフラワーができるような気がしました。すぐに春まきで試したところ予感的中。今まで使っていた品種と比べて光沢感があり、毛羽立ちも発生しませんでした。

「スパイラル」ロマネスコの栽培に挑戦!

そして、その翌年の農場オーブンデーでは「スパイラル」ロマネスコを発見。形の珍しさ、なじみのなさ、うまく作れるのか……、果たして売れるのか……、とありあえず2000株ほど作付けをしたところ初年度としては満足のいく株が収穫できました。

出荷方法にもこだわり、ひとつひとつフィルムで包んでいます。通常カリフラワーはお客様がそのまま手にとるためにどうしても花蕾が店頭で傷んでしまいます。もっと良い状態でお客様に届けるには……、と考え付いたのがこの個別包装です。坂東市は元々レタスの大産地。レタス用の包装機械をうまく応用し、専用のフィルムで包んで出荷したところ消費者に大好評でした。

流通に関わる東京シティ青果では

ミニママ倶楽部の流通に結成当初から関わっている東京シティ青果の朱亀氏はこう言います。

「近年、人は満腹ではなく満足を食に求めています。その満足を与えられる食材の1つがこのミニカリフラワーなんです。現在は東京の量販店を中心に販売しております。初めのうちはミニサイズへの抵抗感もありましたが現在では人気も高まり、今後は流通量を3倍、4倍へと増やすことも可能だと考えています。ミニカリフラワーはまだまだ発展途上。これからもっと面白い展開ができる野菜です。」



オリジナルキャラクターがかわいい専用の包装フィルム

夢は七色のカリフラワー

現在は5種類(4色)のカリフラワーの栽培を行っています。夢は七色のカリフラワーです。そしてミニカリの産地を言えば岩井!といわれるような産地を目指しています。